



Japan Society of
Youth and Adolescent Psychology

News Letter

第 58 号 2012 年 6 月 30 日
発行：日本青年心理学会事務局

■目次

<第 20 回大会委員長挨拶>

佐方哲彦：日本青年心理学会第 20 回大会のご挨拶

<特集> ネット・コミュニケーションと青年

杉浦 健：ネット・コミュニケーションはアイデンティティ形成を助けるか

伊田勝憲：ネットによる“居場所”開拓と青年

山田剛史：ネット・コミュニケーションの肥大化による大学教育と青年への影響

岡本祐子：ネットによる大学・大学院教育の変化の光と影

— 利便性への快感と「世代継承性の危機」 —

<書評>

橋本 剛：菊池章夫・二宮克美・堀毛一也・斎藤耕二編著

『社会化の心理学／ハンドブッカー人間形成への多様な接近』

杉村和美：山岸明子著『こころの旅—発達心理学入門』

<広報>

都筑 学：研究委員会 2012 ワークショップの報告

白井利明：ニューズレター委員会からのお知らせ

事務局からのお知らせ

日本青年心理学会第 20 回大会のご挨拶

大会委員長 佐方哲彦（武庫川女子大学）

第 20 回という記念すべき 2012 年度青年心理学会の大会を武庫川女子大学で開催することをお引き受けいたしました。開催日程は 11 月 10 日（土）・11 日（日）です。前後に他の心理関連学会や入試等の日程が入ってお忙しい時期かと思いますが、ぜひとも多くの方々に参加していただければと思っています。

武庫川女子大学は約 1 万余人の学生が学ぶ全国屈指の女子総合学園ですが、在籍するスタッフに青年心理学会員が少なく、当初は開催校になることを躊躇していましたが、関西青年心理学会からの全面的なバックアップを受けられることもあり、武庫川学院の支援もいただいたので、武庫川女子大学を会場として提供させていただくことにしました。準備委員会は、若松養亮（滋賀大学）、溝上慎一（京都大学）、則定百合子（和歌山大学）の 3 先生と私で立ち上げましたが、今年度新たに赴任してきた助教の竹中一平さんが加わり、5 名態勢で準備を進めているところです。

第 20 回という節目となる今大会は、人間でいえば「二十歳になった」「成人式を迎えた」「大人になった」と形容できる記念すべき大会です。青年心理学の過去 20 年の来し方を振り返り、アイデンティティを改めて問い直し、これからの未来展望を考え、語り合える場になればよいと切に願っています。その企画の一つとして、長い間関西の青年心理学界をリードされてきた秋葉英則先生（大阪健康福祉短期大学学長）に、「青年心理学界の発展の原動力と

展望—学会創設時の先達・先人におもいをはせる—と題して第20回という節目の大会にふさわしい記念講演をしていただくことになりました。また、若手研究者や大学院生のための講習会として都筑学（中央大学）、高橋雄介（京都大学）の両先生による「縦断研究のデザインと発展する統計技法」（仮題）を開催し、今後の研究展開の参考になる研究法について学ぶことにしています。

会場となるのは阪神電鉄鳴尾駅から徒歩7分の武庫川女子大学中央キャンパス・日下記念マルチメディア館です。「二十歳の成人になった青年心理学会」という記念すべき大会に、会員の皆様がこぞってご参集されますことを心よりお待ち申し上げます。

<特集> ネット・コミュニケーションと青年

インターネットの普及によって、青年をとりまく環境は大きく変化しています。

まずはコミュニケーションの有り様。ネット依存といった批判—辺倒の時代もありましたが、今は、青年にとってのインターネットの意味を考える時期に来ているように思います。たとえば、海外ではインターネット・コミュニケーションによって青年の政治活動が喚起されました。日本でも震災後のネットワーク作りに大きな役割を果たしたのがインターネットです。

インターネットをめぐるトピックを挙げていけばきりがありませんが、今回は、主に、インターネットによるコミュニケーションが、青年の発達や学びにどのような影響を与えているのかに焦点を当てることにしました。ネット・コミュニケーションの実態をふまえて、インターネットと青年の関係について、考えてみようと思います。

（担当：中間玲子・長峰伸治）

ネット・コミュニケーションはアイデンティティ形成を助けるか

杉浦 健（近畿大学教職教育部）

今回の原稿はホームページが充実しているという理由で頼まれたもので、私自身は最新のネット・コミュニケーションについてそれほど精通してはいない。そこで今回は、かつて少し臺が立った青年としてホームページを立ち上げた自分を振り返って、ネット・コミュニケーションの意味、特にアイデンティティ形成に対する意味について考えたい。

もともとホームページを立ち上げたのは、研究に少し行き詰まりを感じて、自分の考えをまとめようと思ったからだ。そのとき大きな意味を持ったのが、読者がいるということだ。反応があるかは問題ではなく、聞き手を想定できることで自分の意見を語ることができた。そして語ることで研究者・教育者としてのアイデンティティが補完できた。自分の考えを発信できるということは、私にとっては、かつてワープロで文章が書けた時以来のレポリューションであった（字の汚さがコンプレックスだったのだ）。

ふだんの生活の中で自分の考えを語ることはそれほど多くない。他者を拘束せずに自分の考えを語れるのは、ネット・コミュニケーションが持つ一番の良さであろう。

総じてネット・コミュニケーションにあるのは緩やかなつながりによる安心感だ。ここ数年のmixiやFacebookなどのSNS（ソーシャルネットワーキングサービス）の隆盛も穏やかなつながりを求める気持ちがあるように思われる。だが一方で、ネットには不用意な発言が集中的な非難となる炎上の怖さや、更新やフォローをし続けないと、と感じてしまう切迫感（SNS疲れと言われる）などのマイナスも散見される。

私は、ネット・コミュニケーションはアイデンティティ形成の助けになりうると考えている。だが、それが当人の唯一のアイデンティティを支えるコミュニケーションにならないよ

うに、すなわち「ネット・オンリー・アイデンティフィケーション」にならないように、日常のコミュニケーションとのバランスを取ることが大切だと感じている。

ネットによる“居場所”開拓と青年

伊田勝憲（北海道教育大学釧路校）

小5から中1にかけて不登校・ひきこもりだった私は、教育学部に進んだ喜びと、一方で心理学へのリアリティショック（半澤，2009）が輻輳し、学修・研究からの逃避先としてウェブページでの発信作業に飛びついた。自分の“居場所”をページで発信していたつもりが、もしかしたらページそれ自体が本当の“居場所”だったのかもしれない。大学入学が1995年で、パソコンが一気に普及した時期と重なった。あらためて自分のネット歴をふりかえると、とにかくマイノリティとしての自分を理解してほしい、存在を世の中に知らしめたいというルサンチマン的な動機に満ちていたように思う。これも内発的動機づけだと言うのは美化しすぎだろうか。

最初は受験生向けの心理学研究室紹介ページの作成を指導教員から請け負って、学生の時間割例や出身高校一覧など、今思えば自他の個人情報満載して嬉々としていた。大学2年から4年まで指導員を務めた県教委の適応指導教室のページを勝手に作り、指導主事には褒められるも大学の指導教員からは大目玉を食らった。院生時代には出身高校の私設応援ページを作り、結果として同窓会公式ページの開設に携わる機会を得た。同時並行で、自らの不登校体験記を綴った「いだかつのりのページ」を作り、雑誌取材や親の会からの講演依頼を受けるようになった。ページ作成は実在の“居場所”開拓でもあった。

大学の専任教員となって8年目、そのエネルギーは紙媒体の「授業通信」へと向けられている。出席カードの感想欄を数時間かけて読み込み、A3両面1枚（多い時は2～3枚）を毎週書き下ろして受講生に配布する。これまた論文執筆からの逃避か、大学内でマイノリティなのか。ネットでは最近Facebookを始めたが、小学校の同級生や自分のゼミの卒業生など、ウィーク・タイズを維持するツールと割り切っている。不特定多数への発信から特定少数重視への転換をもって、自分がすでに青年ではないのだと思う。

ネット・コミュニケーションの肥大化による大学教育と青年への影響

山田剛史（愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室）

本稿では近年のネット・コミュニケーションの肥大化による大学教育と青年（の学びや成長）への影響について考えてみたい。私自身、ICT（情報通信技術）を活用した授業実践やFDに携わっていると同時に、従来のHPやBlogに加え、twitterやFacebookなどのソーシャル・メディアも日常的に使用している。

ICTやe-learningは1990年代には一部の教員が用いる程度であったが、2000年代以降、個人のみならず学部・学科や大学全体で、かつ正課のみならず正課外も含めて、総合的な学生支援の手段として広く利用されるようになった。例えば、学生の学習意欲の低下や授業外学習の欠如といった問題を改善するために、LMS（学習管理システム）を導入する大学が増えてきている。そこには、成績や単位取得状況、学習成果や就職情報、正課外の活動など様々なデータが格納され、教職員は個々の学生の情報を管理・把握し、指導・支援にあたっている。

ICTの普及は、大学教育・学生支援の在り方を大きく変えた。教職員はより細かな学生の学びと成長のプロセスを掴むこと、学生は自身の学びの履歴を振り返り強みや弱みを知ることが可能になった。しかし、学生の学習の質の向上に結びついていることを示す結果は十分に示されていない。また、大学側の「手厚い」支援がもたらす弊害についても考えながら、学生の学びと成長を促す教育・学習環境をデザインする必要がある。

新たなソーシャル・メディアの爆発的な普及は、青年の日常世界を大きく変えた。ネット上の「つながり」はどこまでも拡張し、様々なコミュニティへの参加を可能にした。一方で、他者との関係性を自在にコントロール（フォロー・ブロックなど）することや、省察を欠いた感情の「吐き出し」を行うことも容易になった。それらがもたらす関係性の在り方、自律性や自己・アイデンティティ形成、批判的思考力や課題解決力、ストレス耐性など、青年期心性や学びへの影響について検討していくことが求められる。

ネットによる大学・大学院教育の変化の光と影 — 利便性への快感と「世代継承性の危機」 —

岡本祐子（広島大学大学院教育学研究科）

インターネットが私たちの生活や仕事に浸透して久しい。アクセスできる世界の多様性とともにもその早さは、中年世代の私にとっては驚異的である。日々、顔を合わせる学生たちにとっては、そのツールは何の違和感もなく、生活と研究に馴染んでいるように見える。私自身もいつしか、その利便性とスピードの快感にどっぷりと支配されるようになり、もう一人の自分が、自分に危機信号を発している。

専門教育・人間教育の世界に、これらの変化はどのように影響しているのだろうか。得られる情報の多様性とスピードは、質のよい専門家や成熟した心をもつ成人を育てるために、手放しでプラスに作用しているといえるのであろうか。インターネットの驚異的・脅威的な発達によって、直接対面して教を請わなくても、ネットで容易に情報にアクセスできるようになった。それは決してデメリットばかりではないが、失われつつあるものも相当、多いと感じている。ワンクリックで瞬時に事が展開する快感に馴染むあまり、一つの問題や課題を自分の中にじっくり抱え、味わい、仲間と語りつつ考えを深めていくという営みがずいぶん貧しくなった。上の世代から「深く」学ぶことの魅力を感じとれない青年も少なくない。先生を常に眼近に「見て学ぶ」「師の仕事や技を見て盗む」という営みは、多くの青年にとってはイメージすら難しい世界となった。これらは、人間を相手にする専門家の育成にとっては、危機的な事態である。

今日は、世代継承性の危機の時代であると言われている。具体的には、継承されるべき過去の重要な事実が語り継がれなくなっていること、後継者がいないために途絶えようとしている高度な伝統文化や技芸が、現代のわが国には多数存在していることなどである。大学もまた、高度な知性と人間性の育成・継承の場であるはずである。ネットの利便性によって節約できる時間と労力を、人間の心の深奥へ至る歩みに向けることのできる次世代を育てたいと、模索の続く昨今である。

<書評>

菊池章夫・二宮克美・堀毛一也・斎藤耕二編著 『社会化の心理学／ハンドブック—人間形成への多様な接近』

（川島書店，2010年11月刊，本体4,410円）

橋本 剛（静岡大学）

過去2冊のハンドブックを基盤として、さらに最新の研究動向を盛り込んだ大著である。人間とは社会的動物であるという常套句に則れば、社会化の理解は人間理解と実質的に同義といっても過言でない。そして心理学が人間理解の学問である以上、本書が心理学徒にとって必読の書であることは確かであろう。

3回目の試みである本書の特徴として、社会化概念の再検討に積極的に取り組んでいる姿勢が挙げられる。この背景には、編者の菊池氏がまえがきで言及しているように、社会化という概念が有効であるためには社会システムの安定性が求められる一方で、その展望が不明

瞭な現状では、社会化概念そのものの組み替えや再構成も必要ではないか、という問題意識がある。実際に、社会的学習を通じて既存の社会規範を内在化していく過程という従来の社会化概念では、現代社会を説明するには、苦しい側面もあることは否めない。たとえば「晩婚化・非婚化」(8章)や「宗教の希薄化・世俗化」(22章)は、社会化なのか、それとも反(非)社会化なのか。社会が多層化・多元化するほど、どの社会に社会化していくのかという選択も複雑化し、既存社会への反(非)社会化が、新たな社会への(新)社会化にもなる。本書ではその点を踏まえて、従来の社会化概念に対する疑義も随所に示されている。たとえば2章や3章における、社会化における進化や遺伝の重要性に関する議論。あとがきでの編者の二宮氏による「大人(古いメンバー)も、子どもや青年(新しいメンバー)によって、社会化される」という指摘も、既存社会、そして既存の社会化概念を問い直す上で示唆に富むものである。

結局、社会化の概念を考えると、そこで言うところの「社会」とは何か、という議論は不可避である。そして、本書で議論された「個人の社会化」とは、「社会の個人化」との双方向的ダイナミクスによって進展しているのではないかと、などと漠然と感じている。

山岸明子著『こころの旅—発達心理学入門』

(新曜社, 2011年6月刊, 本体1,995円)

杉村和美(広島大学)

私は山岸明子先生のファンである。先生の教科書、論文、著作のいずれにも、日本では触れられることが少ない青年期の認知発達と、それに伴う青年の世界の見方の変化が描かれているからである。それも分かりやすく生き生きと。このことを教えてくれたのは久世敏雄先生であった。私が自分の研究テーマであるアイデンティティについて勉強し始めた頃、久世先生に指導を受けに行くとき「山岸君の論文を読みなさい」、「山岸君がどこそここう書いている」とおっしゃったのである。それで「おとなになるということ」(心理学評論, 1983, 26, 272-287), 「行動の主体としての自我の形成」(教育学研究, 1986, 53, 347-354)などを繰り返し読んだ。その後の先生の多くの研究論文や著作はいつも気になる。今回の著作にも、こうした先生独自の視点が存分に盛り込まれている。私が考える本書のポイントは次の2点である。

第1は、バランスのよさである。本書は、乳児期から老年期までの各時期の特徴について、生物学的な変化、とりわけ認知発達から始まり、自我発達、それらの社会との関わりに至るまでバランスよく取り上げている。また、発達の普遍性と社会・文化差および個人差、発達の可塑性と現実的制約の中での発達という、発達心理学における基本問題がすべての章を貫いている。

第2は、コラムの楽しさである。著者は、発達心理学の理論や実証研究の知見を裏付けるために、様々な事例、映画、小説などを登場させ、自身の見解も織り交ぜて解説する。著者が最も書きたかったのは実はコラムではないかと思う。コラムというと本文に盛り込めなかった余滴を扱うことが多いが、本書では違う。本文をより深く、背景も含めて、日常レベルで理解する大きな役割を担っている。

ひとりの著者が自身の視点を明確に打ち出したテキストは貴重である。しかもそれが手頃な厚さで、十分な専門用語と図表、それらの分かりやすい解説も含んでいる。その意味で、本書は授業や研修など様々な場面で多くの人に活用されるのではないかと思う。

研究委員会 2012 ワークショップの報告

委員長 都筑 学

2012年2月26日に、中央大学多摩キャンパスにおいて、研究委員会ワークショップが開

催されました。今回のワークショップの目的は、研究委員会が設定した長期的研究テーマ「青年とは誰なのか」を実証的なデータにもとづいて検討することでした。研究委員会のメンバーがメーリングリストで互いの意見を交換しながら、調査計画の立案や調査用紙の作成をおこない、自分たちの勤務校を中心に調査データ（183名分）を収集するという初めての試みでもありました。

今回のワークショップのテーマは、「青年期の始まりと終わりをとらえる」でした。報告者は、研究委員会のメンバーである池田幸恭（和洋女子大学）会員で、①大学生による「青年」のイメージ、②大学生が認識している青年期の始まりと終わり、に関する調査データの詳細な分析結果を紹介してもらいました。報告では、津留（1973）や今林他（1985）などの先行研究で得られた知見との比較もおこないながら、今回の調査結果の特徴が検討されました。

討議は、捉えられた青年のイメージ、青年イメージの分析手法、青年のイメージを把握する枠組み、青年という用語の意味、青年を捉える指標、青年になっていくこと、学年の持つ意味、青年期の終わりと大人の始まりなど、多岐にわたって繰り広げられました。研究委員会としては、今後も引き続き、シンポジウムとワークショップを通じて、長期的研究テーマを追求していきます。ご意見、ご要望をお寄せ下さい。

なお、ワークショップの記録は、『青年心理学研究』に掲載されますので、そちらを参照してください。

ニューズレター編集委員会からのお知らせ

委員長 白井利明

2012年度より、新委員として、長峰伸治、則定百合子の両氏に入ってくださいました。任期は4年です。継続委員は、小澤一仁、中間玲子の両氏です。ご支援・ご協力のほどよろしく申し上げます。

<事務局から>

I. 2012年度大会について

冒頭の記事にもありましたように、今年度の大会（20回大会）につきましては、今回、1号通信を同封しております。積極的なご参加、ならびに発表をお願いいたします。

開催場所：武庫川女子大学 中央キャンパス

兵庫県西宮市池開町 6-46 阪神電鉄 鳴尾駅より徒歩約7分

<http://www.mukogawa-u.ac.jp/gakuin/access.htm#chuou>

準備委員長：佐方哲彦先生（武庫川女子大学文学部）

日程：2012年11月10日（土）～11日（日）

II. 役員選挙について

本年は役員選挙の年にあたりますので、今回の送付には改訂された名簿と選挙関係の書類・封筒を同封しました。説明の文書をよくお読みになり、8月末日までに投票をお願いします。

III. 久世敏雄先生がご逝去されました

本年1月30日に、当学会に多大なる貢献をいただきました名誉会員の久世敏雄先生（名古屋大学名誉教授）が、ご病気のためお亡くなりになりました。慎んでご冥福をお祈りいたします。機関誌24巻2号には追悼記を掲載する予定です。

IV. 会員情報に関するご報告とお詫び

この度、会員の方のご指摘により、本学会ニューズレター第46号（平成20年7月25日付け発行）に掲載された会員情報が流出していたという事態が判明しました。これは、当学会が情報提供の契約をしていた国立国会図書館に、会員異動の情報が掲載されたままのニューズレターの原稿ファイルが誤って提供され、それが同ホームページから閲覧できる状態になっていたというものでした。

同ホームページにて公開されていたニューズレターは問題が発覚したその日（平成24年4月12日）のうちに非公開にするよう対応しましたので、それ以降は学会員の個人情報は流出していません。現在、学会のホームページにてニューズレターを公開しておりますが、そこでも会員異動の欄では個人情報を削除しております。また、直接関係された方には経過を説明し、お詫びをいたしました。

日本青年心理学会理事長および常任理事会としましては、学会員の皆様に多大なご迷惑をおかけした今回の事態を厳粛に受け止め、深くお詫び申し上げますと共に、再発防止策を講じ、学会員の皆様の信頼回復に全力で取り組む所存です。何卒ご理解、ご寛恕賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

V. 学会機関誌および大会論文集の廉価頒布キャンペーンについて

当学会では、機関誌ならびに大会発表論文集の在庫を廉価にてお譲りするキャンペーンを2013年2月28日までの期間限定で行っています。19号までの機関誌のバックナンバーが200円、大会論文集は100円で購入していただけます。

対象は、当学会の正会員・学生会員で2012年度の年会費を支払われた方、および名誉会員です。その目的は、(1)事務局業務委託に関連して、在庫を圧縮する必要性が出てきたこと、(2)若い会員の皆様には入会前の研究成果に触れていただくこと、の二点です。詳しくは学会HPに要項ならびにお譲り可能な号が出ていますが、以下の点にご注意ください。

- (1) 在庫が5冊を切っていない号が対象です。現時点でお譲りできます号は、機関誌で1～3号、6～9号、12～19号、大会論文集で第2～11回、13～16回、18～19回のものであります。
- (2) 送料は着払いが原則ですが、可能な場合はレターパックを使用し、請求金額に送料を含めます。いずれも後払い（振替用紙を送り、郵便口座に入金）です。
- (3) お申し込みはできるだけメールでお願いします。でなければ郵便でお願いします。

VI. CiNii における当学会機関誌の閲覧有料化について

機関誌の年2号化に伴い、年会費の値上げ以外の収入の途を模索する必要から、当学会では国立情報学研究所の邦文論文データベース「CiNii」における機関誌「青年心理学研究」の全文閲覧を有料化することに致しました。この4月からすでに有料になっています。具体的には、CiNiiにID（年間2,100円）をとった人のうち、①自学会員が閲覧する場合は無料、②非会員の方が閲覧する場合は100円（国立情報学研究所に落ちる手数料を加えて157円）であり、③IDをとっていない人が1本あたりの料金を払ってみる場合（PPV ; Pay Per View）も100円（手数料を加えると630円）となり、さらに「機関誌許諾」という、大学や研究所などが契約している回線でみる契約も結びました（例えば大学のネットワークを介して閲覧した場合、その機関が支払うこととなります）。なお「大会発表論文集」の閲覧は、学会への入会者を増やすという意味も込めて、引き続き無料としています。

VII. 改訂された名簿について

5月上旬から同月28日までのあいだ、会員の皆様には名簿情報の確認と更新をお願いして

おりました。今回同封しました名簿がその更新を反映させたものです。万が一誤り等がございましたら、事務局までお知らせください。また非公開希望を出していないのに名簿では氏名とローマ字読み以外が非掲載になっておられるという方につきましては、今回の名簿更新の際の「非公開希望の項目」欄に、「いずれも非公開を希望しない」という意味の「⑩」を記入していなかった方です。その方については、個人情報保護の重要性に鑑みて、氏名とローマ字読み以外のすべての項目を非掲載としました。そのような方で、もし「この項目を公開可として登録したい」という方は、事務局までその旨をご連絡ください。次回の発送時に同封する正誤表に掲載させていただきます。

VIII.年会費について

前号のニューズレターにてお知らせしてまいりましたように、2012年度より当学会の年会費を値上げいたしました。年会費を納入してくださった皆様にはご理解とご協力をいただき、感謝申し上げます。

ただ、前号のニューズレターに同封しました払込取り扱い票の印字に、以下の誤りがございました。それは学生会員は本来4,000円のところで、4,500円と記載してしまっただけです。学生会員のみなさまにはメールならびにハガキでお知らせいたしました。日が経って納入された方などに4,500円を納入くださった方がいらっしゃいます。その方には個別にご連絡をいたしました。余剰の500円は2013年度の会費にまわさせていただきます。まだ納入されていない方は、今回も払込取扱票を同封いたしましたので、こちらをお使いください。よろしくお祈りいたします。

今回、機関誌24巻1号の発行にあたり、2012年度の年会費のみを未納入の方には、事務局業務の軽減のため、お送りすることにいたしました。ですが本来は完納の方にのみ機関誌はお送りするものであり、何卒、早急に年会費を納入ください。なお本年度より、年会費は当該年度の5月末までに納入いただくことになっております。

また大学の研究費から年会費を納めていただく際には、**必ず、ご本人から**学会事務局宛てに、「何月（何日頃）に〇〇大学から××（お名前）分の会費が納入される」というご連絡をメール等にてお送りください。

IX.会費の納入状況のお知らせについて

一昨年度より、タックシールに付記して会費の納入状況をお知らせしています。また未納がある方には、納入状況に合わせた払込取扱票を同封しております。2012年度分より年会費の額が変更になっていますので、特に2年以上の未納分がある方は、正確に計算をいただき、併せて納入していただきますよう、お願い申し上げます。納入状況の記号は以下の説明と照合してください。なおこの記号は、6月25日時点のものをもとに作成しています。行き違いがございましたら、ご了承ください。

納入状況A：納入の必要はありません。※不足額がある方は「A」と表示しています。

納入状況B：2011年度までは完納ですので、2012年度分の納入が必要です。

納入状況C：2010年度までは完納ですので、2011～12年度の2年分をお願いします。

※正会員ですと、5,000円（2011年度分）＋7,500円（2012年度分）となります。

→このように年度ごとに正確な計算をお願いします。

納入状況D：2009年度までは完納ですので、2010～12年度の3年分をお願いします。

納入状況E：（以下、未納の年数が1年分ずつ多いことを意味します）

入金の振替口座は「00970-0-125990」です。なお「学生会員」と「一般会員」の区別に注意してください。大学院等に学籍がある方（科目履修生は含まれません）は、

オーバードクターや研究生も含めて、「学生会員」となります。未納年が複数ある方で、途中からこの区分が移行した方は納入額にご注意ください。

★ ゆうちょ銀行以外の銀行からの振り込み先

店名：〇九九店 当座預金 口座番号：0125990

※この当座預金口座には、銀行のATMからも入金ができます。

※ゆうちょ銀行に口座を持っていて、「ゆうちょダイレクト」の登録◆をしていればインターネット経由で入金できます（「ゆうちょダイレクト」からの振替は月5回まで手数料無料なので手軽&お得です）。

◆http://www.jp-bank.japanpost.jp/direct/pc/what/dr_pc_wh_index.html

X. 会員異動

XI. 送付先不明の方のお名前

学会 HP 掲載にあたり、この2つの記事については削除しています。

XII. 関連学会による研究会のご案内

(1) 日本パーソナリティ心理学会 第21回大会

当学会の会員の方も何人か入会されている日本パーソナリティ心理学会より、第21回大会の案内が来ております。10月6日（土）・7日（日）に島根県民会館（島根県松江市）で開催されるとのことです。この大会は若手会員の有志グループによる主催となっており、様々な新しい試みを導入していただけるとのこと。興味のある方は、<http://www.jspp2012.jp/>までアクセスしてみてください。

(2) 日本キャリア教育学会 第34回研究大会

当学会の事務局があります滋賀大学大津キャンパスにて、10月27日（土）・28日（日）に開きます。大会テーマは「今、新たに求められる学校と職業の接続」とし、初日午後には東京大学総合教育研究センター准教授の中原淳先生による基調講演、ならびにシンポジウムがございます。京都駅で新幹線を降りていただくと在来線で4駅という交通至便の場所ですので、是非ご参加ください。大会ホームページは以下です。

<http://www.edu.shiga-u.ac.jp/~wakamatu/jssce/>

XIII. 学会に献本がありました

4月上旬に昭和堂という出版社より、以下の献本がありましたので、報告いたします。

チュオン・ルムリアッセイ著『カンボジア・エリートの青年心理学—内戦から復興へのアイデンティティ形成—』（7,500円＋税）

著者の方は神戸学院大学大学院人間文化科学研究科人間行動論専攻の修士課程を修了し、同大学で博士（文学）の学位を取得され、現在、王立ブノンペン大学大学院教育学研究科で准教授をなさっているそうです。

日本青年心理学会事務局

The Japan Society of Youth and Adolescent Psychology

〒520-0862 滋賀県大津市平津2丁目5-1

滋賀大学教育学部 若松研究室内

TEL & FAX : 077-537-7770

E-mail : seinenshinri@edu.shiga-u.ac.jp

Homepage : <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsyap/>

振替口座 : 00970-0-125990

口座名称：日本青年心理学会
お問合せはできるだけ E-mail でお願い致します。